

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (教育学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	李 佳 洋
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 中国人上級日本語学習者における日本語文の反復リピーティングが文の記憶に及ぼす効果 —ワーキングメモリ容量を個人差要因とした実験的検討—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	松 見 法 男	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	中 條 和 光	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	柳 澤 浩 哉	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、中国語を母語とする上級の日本語学習者（以下、学習者）を対象として、ワーキングメモリ（working memory：以下、WM）容量を個人差要因として設定し、日本語文の反復リピーティングが文の記憶に及ぼす効果と、それを支えるメカニズムの一端を解明したものである。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、リピーティングの効果とその言語処理過程について、WMの機能に関する先行研究を概観した。併せて、課題反復の効果と記憶の保持に関する先行研究も吟味した。そして、先行研究の問題点を指摘した上で、本研究の研究課題を提示した。</p> <p>第2章では、4つの実験について述べた。実験1では、リピーティングの遂行成績に及ぼすWM容量と試行数の影響を検討した。実験の結果、全体的に3回のリピーティングが効率的であり、より厳密には、WM容量の大きい学習者では2回のリピーティングが、またWM容量の小さい学習者では3、4回のリピーティングが、言語情報のほぼ完全な処理を促すことがわかった。</p> <p>実験2と実験3では、記憶痕跡の強さと情報処理水準の深さの観点から、反復リピーティングが学習者の文の記憶に及ぼす効果を検討した。実験2では、顕在記憶の面から、反復リピーティング課題の後、直後と遅延の2条件下で手がかり口頭再生テストを実施した。実験3では、潜在記憶の面から、反復リピーティング課題の後、実験3-1では直後テストを、また実験3-2では遅延テストを、それぞれ実施した。いずれの実験でも、前出文に対する反復リピーティング課題を与えた後、前出文との間で、単語や、意味的重なりが異なる文を後出文（ターゲット文）として呈示し、再生テストとしてこれらのリピーティング課題を与えた。実験の結果、(a) 反復リピーティングを通して、語彙レベルでの形式と意味の結びつきが促進され、口頭再生すべき文の検索が容易になること、(b) 深い水準の情報処理を続けて行うことが記憶痕跡の強さを増大させること、(c) 長期記憶からの情報検索の効率が、後出文の口頭再生の流暢さにつながることで、の3点が明らかとなった。</p> <p>実験4では、WM容量の違いが1回目のリピーティング時の情報処理に与える影響を検討した。前出文に対する1回のリピーティング課題の後、前出文との間で、単語や、意味的重なりが異なる文を後出文（ターゲット文）として呈示し、これについてのリピーティング課題を与えた。実験の結果、WM容量の大きい学習者は文レベルの構文情報まで処理できるのに対し、WM容量の小さい学習者は語彙・チャンクレベルの情報処理にとどまり、後出文の口頭再生においても情報処理が続いていることが明らかとなった。</p>			

第3章では、4つの実験結果をまとめ、反復リピーティングが学習者の文の記憶に及ぼす効果と、それを支えるメカニズムについて、WMにおける処理資源の配分の仕方に焦点を当て、総合的に考察した。そして、本研究の学術的意義と日本語教育への示唆を述べ、今後の課題に言及した。

本論文は、以下の3点で高く評価できる。

1. 第二言語の練習法としてのリピーティングの効率的な反復回数について、全体的な現象とともに、学習者の認知能力であるWM容量の大小による違いを明らかにした点である。
2. 反復リピーティングが学習者の文の記憶に及ぼす効果について、WM容量が大きい学習者と小さい学習者では、音声情報の処理と保持が並列的に可能となる言語情報の量が異なることを明らかにした点である。
3. 言語情報の処理単位を単語と文に分けて検討し、リピーティングの効果を支えるメカニズムの一端を、WMモデルを援用して解明した点である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 5 年 8 月 4 日

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)